

# 榮 榮



黄河が、延川県を40余里に渡って流れる途中に名の知れた大峽谷・乾坤湾があり、ここ何年間、この乾坤湾を県の観光資源の目玉にしようと開発されて来ています。小程村は乾坤湾に近く最も多く利益を得る村です。乾坤湾に来る観光客は殆どこの村で足を休め、喉の渇きを癒し、簡単な食事を取っています。

ある日、陝西テレビ局の一行が乾坤湾の雄姿を撮影しにやって来ましたが、彼らはいろいろ準備を整えて来ましたが、上空から乾坤大湾を俯瞰した撮影もしたいと熱気球を運び込んでいました。その年、私は延川県の文化局で副局長の職にあり、当然彼らに同行して出かけました。

車の列ががたがた路に揺られ、やっと乾坤湾に着いたときはもう正午で、太陽は頭の上にあります。撮影には向きません、皆、午後3時ごろまでゆっくり休んでから、色どり鮮やかな熱気球を広げ、液化燃料に点火して風の向きなどを調べていました。大きな彩球が籠をぶら下げ、ぶら下がった籠には撮影技師が座って、彩球はゆっくりと空に上がり始めました…と、まさにこの時、西の山梁に黄色い土を吹き上げて突風が巻き上がるのが見えました。村人が“竜巻だ”といい、もう続けることはできません。皆で心と力を合わせ、迅速に既に高く上がった気球を引きおろしました。心を逸(はや)らせていた撮影技師は顔面蒼白となり、同僚に向って何度もお礼を言いました。

突風の後は大雨になり、撮影隊は付近の小程村に撤退せざるを得ず、時機を待つことにしました。しかし、天気は一向に良くなり、雨は断続して三日間降り続き、一筋の陽光さえ射さないという状態で、撮影隊員一同は一日中、家主のオンドルの上でトランプをして時間を過ごすしかありませんでした。私はすぐ家主の長女である榮榮と仲良しになりました。壁に張り付けてある賞状から、榮榮は、正式名は郝雪榮といい、毎年の試験では学年の前の方の何人かに入り、この度の学年末の試験ではなん

と一番でした。しかし、彼女の父親は愁眉を開きません。榮榮の中国入試試験で3点足りず、県市の中学には入れないのです。若しもっと遠い永坪中学校に行くことになれば、越境入学費として千元以上を更に支払わなければなりません。家は余裕がありませんから、榮榮は学校を止めざるを得ないでしょう。この家に三日泊まり、30過ぎの家主は何と5人もの子どもがいるということが分かりました。榮榮は長子で、下に女の子が三人続き、末の5番目だけがやっとなりの男の子で、家中が朝から晩まで彼を囲こむように過ごしています。特に榮榮はまるで母親の責任を肩にしているようで、毎日、男の子を背負い、食事は先に自分で噛み砕き、口から口へ移して男の子に食べさせ、私は親鷹が雛鷹に餌を与えている情景を思い浮かべました。榮榮の家は村で唯一の店を開いており、毎日、村人が来ては糸とか針とかこまごましたものや日用雑貨を買いに来ますが、それも榮榮が全部親に代わって売っています。貧しい家の子どもは早くから家のことをするようになるのですね。



三日が過ぎ、十何人かの男どもが家主の蓄えた食糧をきれいさっぱり食べつくして、天気はやや好転しました。乾坤湾を空から撮影しようと言うものも居ず、矢も立てもたまらないという様子で県市に戻ってゆきました。

その後、(延川市に戻って)何日か経って或る晩、友人たちが集まり気持ちよく飲んで、さて自分の家に帰ろうとしたところへ、小程村の家主が榮榮を連れてやってきました。彼らもまだ食事をしていない様子なので、すぐレストランに引き返し、余りものの煎餅、麺類とまだ開封していない飲み物を与えお腹をこしらえさせました。どうしても彼女を進学させられないというので、明日にでも県の主管(教育関係の)にお願いしてみましようかと伝えました。翌日、主管に話しますと、積極的に関係方面に頼んでくれたのですが、父娘は既に小程村に帰ってしまっていました。何日か後、戸の隙間にメモが挟まれているのを見つけ、開いてみますとそれは榮榮が残したものでした。メモの内容に私の心は痛みました。

周小父さん、私は学校に行けません。学校に行くのはとてもとても難しいです。

周小父さん、どうすればいいのですか？

周小父さん、私は小父さんの子どもになってもいいですか？

周小父さんは、本当に本当にいい人です！

どうかお体を大切にして、何事も順調に行きますように。では、時間がありませんので、これで書くのを止めます。

陝西省延川県土崗郷小程村 郝雪榮同学

この後、私は何度も小程村に行き、この親子を見かけましたがメモのことはどちらからも何も言いませんでした。この種の問題にどんな解決法も見つけ出せず、また、この親子を慰めるどんな話も思いつくことができません。このようなことはここでは当たり前で、何と応えてよいのか難しく、いずれにせよ、私という人間の力量では限界があるのです。

家の暮らし向きが貧しく、労働力を必要とされ、栄栄は毎日弟を負い、正式に“小妈妈”の重い責任を担うようになりました。彼女の“大きくなったら科学者になりたい”という夢ははかなく消えてしまいました。栄栄を見かけるたびに胸が痛み、カメラを抱えていても(栄栄の)写真を写す気持ちになりません。細かなことをいうまでもなく、誰でも郝雪榮の今の様子や未来がどうであるかは想像に難しくはないでしょう。

＜その後の



16才になった栄栄は妹たちと弟の小さいお母さんの役割をしっかりと果たしている。(2005年8月撮影)



今も時間を見つけて、妹と勉強をする栄栄(2005年8月撮影)



2005年8月

栄栄の家族

周路先生撮影